

「……は、恥ずかしい」

「恥ずかしいの、好きなくせに」

戸惑う刹那の耳もとでささやくと、直弥は彼女の前襟を力いっぱい左右にはだけた。途端、ふるんとFカップのまろやかな丘が弾けるようにこぼれた。

白い肌が月明かりを反射して、ぼうつと闇に浮かびあがる。

肌寒い夜気に直接触れた乳房は、かすかに粟立^{あわだ}っており、すでにその先端はいくばくか硬さを帯びているようだ。

「……っや！」

刹那はためらいがちに両手で胸を隠した。

だが、直弥は彼女の羽織の前紐を解いてやり、羽織の襟を立てるようにして胸を横からカバーするようにと彼女に指示する。

躊躇^{ちゆうちゆう}する刹那だが、彼女にとって直弥の命令は絶対だ。

しぶしぶ胸から両手を離すと、頬を染めつつ羽織の襟を持ち、胸の横を覆い隠す。

「綺麗だ……。刹那……」

直弥は、そうつぶやくと、目の前に捧げられた見事な巨乳に手を触れた。そして、両脇から中央に向かって、たっぷりの柔肉同士を寄せるようにぐっと力をこめてみる。



「……あつ」

直弥の指が自らの乳房にうずまり、その指の隙間からまろやかな肉がはみでている様子を目にして、刹那は顔を赤らめる。

そんな彼女にわざと見せつけるように、直弥は指を開いたり閉じたりして、しばらく彼女の胸の弾力を楽しむ。

（粘土ねんどみたい……。こんなに形を変えて、い、いやらしい……）

目もとを上気させ、刹那は羞恥に耐える。

が、たまらず視線を胸から逸そらした途端、直弥の指が彼女の乳首を力いっぱいつまみあげた。

「……つつ、うう、あああ……い、痛っ」

刹那が痛みに身悶えつつ、困惑した表情で彼の顔を見ると、直弥は彼女を軽く叱りつけるように言った。

「目逸らしちゃだめ。ちゃんと自分の胸を見なさい」

「っは、はい……」

刹那がそう答えて、再び自分の胸を見つめると、直弥は愛撫を再開した。

人差し指と親指で硬くそそり勃たった乳首をくりくりといじりながら、残りの三本の

指を鍵盤けんばんを叩くように順番に動かす。

その大胆な指の動きに、ポリウムたつぷりの乳房はふるふると翻弄ほんろうされ、始終形をいやらしく変えてゆく。

「……あ、あん、ああ……、やああ……」

はあはあと喘ぎながら、直弥に揉みしだかれる乳房の様子を見ていると、それだけで刹那の股間はひくついてしまう。

恥ずかしい蜜がじんわりと染みだして、ショーツの二枚布を湿らせてゆく。

刹那の腰は、無意識のうちにもじもじと落ち着きなく揺れ動いてしまう。

「気持ちよさそうだ、刹那。すごくいい顔……」

「んっ、んう……。だ、だって……。と、殿が、そ、そんなに胸を苛めるから」懸命に声をこらえながら、刹那は困ったように上ずった声で言葉をかえす。

「ああ、胸だけじゃもの足りない？」

「そっ、そういう意味ではなくてっ。あ、こ、こら。と、殿お……」

直弥は右手を乳房から離すと袴の脇からなかへと差し入れた。

刹那の両手は羽織で胸をカバーするためにふさがれていて抵抗できない。

直弥にされるがままだった。その不自由さが、どこか妖しい快楽を刹那にもたらす。

彼の右手が刹那の太腿の側面に触れた。

むっちりとした太腿の感触を楽しみながら、直弥は刹那を焦らすようにゆつくりと手を後ろへと這わせてゆく。

豊かに張った形よいヒップの丸みをショーツ越しに感じつつ、円を描くように尻たぶを撫でまわす。

「あぁ……」

右手でヒップを撫でまわされつつ、左手で乳首を力強くいじられると、ぞくぞくとした感触が子宮から背筋を這い上がり、刹那の脳を麻痺^{まひ}させる。

刹那はしどけない表情を浮かべ唇をかすかに開いた。

その悩ましげな顔は、あまりにも扇情的で直弥の胸をどきまぎさせる。つづいて、直弥はヒップの下のほうへと手を這わせてゆく。

じきに指の先端が、ショーツに隠された女陰の入り口へと到達する。

「んっ……」

そこを指先で軽くこづかれた途端、刹那が身体を震わせた。

すでにそこはじつとりと濡れていた。

「す……。後ろまで濡れてる」

「そ、そんな、こと……」

「濡れてるって、ほら、足開いて」

「……い、いや、そ、それは」

「いいから、ほら、開きなさい」

「は、い……」

直弥に強く言われると、刹那はおずおずと歩幅分足を開いた。

すると直弥は内腿に手を伸ばし、すでにたつぷりの愛液を吸い取ったショーツのク
ロッチ部分を強引に左に寄せて、いきなり中指を彼女のラヴィアに挿入したのだ。

「ん、んん、んううう、や、ああああつ、そ、んな。い、きなりい」

刹那は首を軽く左右に振りたてて、思わず甘い声をあげてしまう。

「ほら、濡れてるでしょ？」

直弥はサディスティックな笑みを浮かべると、狭い彼女のなかで中指をくにくにと
動かしてやる。

たちまち、くちゆくちゅという淫猥な水音が聞こえてくる。

「やつ。やああ、お、音、だ、だめ。と、殿おお……」

「それでも濡れてないって言うの？　こんなに音してるのに、ほら」